

古今著聞集

卷第七

第八 能書

尺牘せきとくの書疏しよそは、千里りの面目めんぼくなりといへり。凡およそ六むつの文ぶんは
体ていの姿すがたをあらはす輩ともがら、驚鸞反鵲きやうらんへんじやくのいきほひを習ならふ人ひと、僅わずか
に一字じの跡あとをのこして、遙はるかに万代ばんだいのほまれをいたす。も
ろくの芸能げいのうの中に、手跡しゆせきまことにすぐれたり。
嵯峨さが天皇てんわうと弘法大師こうぼうだいしと、常つねに御手跡ごしゆせきを争あらそはせ給ひけり。

ある時とき御手本おんてほん、あまた取りといださせ給ひて、大師だいしに見せ
まるらせられけり。その中なかに、殊勝しゆしょうの一巻くわんありけるを、
天皇てんわう仰事おほせごとありけるは「是これは唐人たうじんの手跡しゆせきなり。その名を
知らず。いかにもかくは学まなびがたし。めでたき重宝ちゆうほうなり」
と、頻しきりに御秘蔵ごひざうありけるを、大師だいしよくくいはせまるら
せて後のち「是これは空海くうかいが仕つかうまつりて候ふものを」と、奏そうせ
させ給ひたりければ、天皇てんわう更さらに御信用ごしんようなし。大おほきに御不審ごふしん

ありて「いかでかさる事あらん。当時たうじかゝるやうに、甚はなはだ異いするなり。はしたて、及およぶべからず」と、勅定ちよくぢやうありければ、大師だいし「御不審ごふしん、まことにそのいはれ候ふ。軸ぢくを放はなちて、あはせめを御叡覧ごえいらん候ふべし」と申させ給ひければ、即すなはち放はなちて御覧ごらんするに、その年としその日ひ、青龍寺しやうりうじにおいて書すレ之を。沙門空海しやもんくうかいと記しるされたり。天皇てんわうこの時とき御信仰ごしんかうありて、「誠まことに我われにはまさられたりけり、それに

とていかにかく、当時たうじのいきほひには、ふつとかはりたるぞ」と、尋ね仰たづねおほせられければ「その事ことは国くにによりて、書き替かへて候ふなり。唐土たうどは大国たいこくなれば、所ところに相応さうおうして、いきほひかくの如し、日本にほんは小国せうこくなれば、それにしたがひて、当時たうじのやうを仕つかうまつり候ふなり」と、申させ給ひければ、天皇てんわう大に恥はぢさせ給ひて、その後のちは、御手跡ごしゆせきあらそひもなかりけり。

大内十二門おほうちもんの額がく、南面三門みなみおもてもんは弘法大師こうぼうだいし、西面三門にしおもてもんは大内記ないき小野美材をのよしき、北面三門きたおもてもんは但馬守たじまのかみた橘逸勢ちはなのはやなり、各勅おの／＼ちよく
を承うけたまはりて、垂露するろの点てんを下くだしけり、東面三門ひがしおもてもんは、嵯峨さが
天皇てんわうかゝせおはしましける。まことにや。道風朝臣たうふうあそん、大だい
師しのかゝせ給たまひたる額がくを見て、難なんじていひける、「美福びふく
門もんは田広たひろし、朱雀門しゆじやくもんは米雀門まいじやくもん」と、略頌りやくじゆに作りてあざ
けりはべりける程に、やがて中風ちゆうふうして、手てわなゝきて手しゆ

跡せきも異ことやうになりなりにけり。(後略)